

議長記者会見（第33回）会見録

日時：令和元年6月24日（月）

午後2時から

場所：石川県議会議事堂

議長応接室



会見を行う福村議長（右）と徳野副議長（左）

皆さんご苦労さまです。

令和第1回、改選後第1回の議会が先ほど終わりました。何でもものが始まるということは緊張しますし、大事に行ったそんな議会でした。

私もたまたま、本当に思いがけなく26年ぶりに2回目の議長させていただいて、これもきりのいい第101代目議長ということなので、ある意味では緊張して、しかしやる以上には力一杯、精一杯やろうと思っています。おかげさまで滞りなく議事を進めることができました。

今議会を振り返りまして、一つはやっぱり、議会冒頭で新しく即位された天皇皇后両陛下

へ議会として総意で賀詞を奉呈いたしましたこと、これは非常によかったなと思っていますし、それから24人の皆さんが活発に質問をしてくれました。改選後第1回目の議会ということで、皆さんやっばり選挙中にしっかりといろんなことを聞いてきていますので、そのことを一つでも早く実現したいという気持ちがすごくあったと思います。

それから、最近の時流と言いますか、いろんな問題が出てきていますよね。川崎の殺傷事件とか、高齢者の交通事故問題とか、あるいはまた子供たちへの虐待の問題とかいろんな忌まわしい事件とかが出てきておりますので、そういうものに対して県政としてどう対応していくのか。日常茶飯事起っているそういう問題に対する質疑、そういうものが非常に多かったように思っています。

そういう意味では、大上段に振りかぶってという質問もあんまりなかったですけど、やはり改選後の第1回ですからこれは当然のことで、ましてや新しい議員が出てきていただいていますので、そしてそのほとんど皆さんも質問をされたし、そういう意味で実のある議会だったかなと思っています。

そういう中で私も2回目の議長ですから、多少はやっばりそれらしいこともしなければならぬのかなと、したいなとそう思いまして、まあそれにはやっばり議会の風通しをよくしたい、特に3期以下が19人(自民党)もおりまして非常に若い人がふえてきましたので、やっばりそういう皆さんが、まあ議会というところは本会議なり、委員会なり質疑というところが土俵ですから、本番ですから、それをやはりしやすくしてあげること、しやすいことが大事なのだらうなとこう思いまして、委員長会議とか、あるいは3期以下の議員皆さんとの意見交換会とか、この間も主要部長12人の皆さん方と色々な意見の交換会をやらせていただいて、そしてやっばり議会と執行部が上手く切磋琢磨できる、またある意味ではお互いにしっかり緊張感を持ってそして闊達に議論を展開できるそういう議会にしなければいけないと、そういうようにいろんな皆さんの意見を聞いて、特に若い人たちが自分たちではなかなか言いにくい執行部に対して、あるいは先輩の議員に対してのそういうような問題を取り上げて今後の改善点をと。これはそんなに難しいことではないので、今まで多少惰性で流れてきたところもあるのでそういう問題を、執行部の皆さんにも今後やっばりこういうことは少しご遠慮してくださいと、あるいは議員の皆さんにもこういう方向でやってくださいとかというように申し上げた。

もう一つはやっばり、車の両輪で執行部と議会がということになると、やはり自ら我々も含めて議員の質を高めなければならない、これが大事なことだと思います。改めて今年度中に議会の勉強会といいますか、研修会といいますかそういうものを2、3回はやりたいなというふうに思っています。

そんなことをやりながら、やっばり改めて議員に選ばれた43人ですから、気を引き締めかね。今、石川県はかなり調子のいいときですが、次の県勢の発展に備えて、議会と執行部お互いに勉強しながら、切磋琢磨しながら、緊張感を持ちながら先を見据えた議論を展開していきたいと、そんなふうに思いながら今議会を過ごさせていただきました。

今日は副議長も同席しています。記者会見なので皆さんからいろんな質問を言っていたいてというふうに思っていますので、以上前置きだけ言わせていただきました。

<質疑応答>

記者

3期以下の議員が19人（自民党）という話でしたが、若手議員が質問をしやすいうような環境づくりにはどういったものが必要だと思いますか。

福村議長

例えて言うと、質問書を出しますと、場合によって「この質問はちょっとやめてもらえないか」とか、「これにかえてもらえないか」とかいうようなことがままやっぴりあると。そうすると、そういうことを言われると質問することがなくなってしまおうと。それはやっぴりおかしいのでね。よほど間違っていることや法律に触れることは別にして、議員が質問したいことはやはり自由闊達にやるということが当たり前の話なので、都合が悪いからかえてほしいとか執行部の側からの申し入れは今後なくしてほしいであるとか、常任委員会で問取りというものがあるのですけれど、前の日かなんか委員の皆さんに「明日の委員会でどんな質問がありますか」って、これはいいと思うのですが、先に質問を聞いておいた方が丁寧な答えができる、数字を入れられる。それはそれでいいのだけれども、そのときに思いつかなくてもその後思いついたこと、あるいはその日の朝に新聞やテレビを見てこれを質問しようと、そんなことをあんまり質問するとあんまり機嫌がよくないというどうも若い皆さんの遠慮があったりしてね。そんなことは全くないので、前もって言うておくことは数字や丁寧な答えが欲しいものなので、我々はそうなのだけどね。そうでないものは、あるいはまた委員会は報告がありますので、その報告を聞いてどんどん質問をするのは当たり前のことなので、そういうことのないように自由に質問のできるような土壌というか環境をつくってやってほしいと、そういうようなことがまだ2、3ありますけれど、初歩的なことですよね、そんなことはある意味ではね。

場合によっては予算委員会で通告しなくても、国会なんかでは爆弾質問みたいのをわざわざどんといくこともある。それが議会なんでね、やっぴり。私も予算委員会を2回とめたことがある、若い、いい時代でね。とめることが目的ではないけど、それくらい活発なというか、迫力のあるというか、活性化した議会になってほしいというのが私の願いです。

記者

予算委員会での質問を聞いていると、やはりそういったやり取りというのが、割と食い下がった質問とかもあったように感じたのですが、その辺はごらんになっていかがでしたでしょうか。

福村議長

そうですね。予算委員会というのは一問一答なので、一問一答ということは答弁に対して食い下がるというか、答弁に対して次々とやって行くのが予算委員会の本来なので、場合によると一般質問の細切れのような質問が19問もあったりしてね、予算委員会でそんなことできるはずがないので、それは一般質問ですよ。一般質問の1項目を細切れにして一つ聞いて答えが出たら次、答えが出たら次とどんな答えを引き出そうかとするのが本来のやり方でね。初めのうちは仕方がないにしても、どんどんと年季を積んできたらやっぱり答弁に対して質問をしていくというのが予算委員会なんですね。

人によりますけれども、私なんかは、最近では年に1回はしなきゃならないことになっていますがね、1時間ならせいぜいで3問ですね。30分なら2問、そのくらいかと、よっぽどいい答えが返ってくればそれで終わるけど、なかなかそんなことはないですからね。だからそういう勉強もお互いにしていかなければという格好だと思います。

記者

一般質問で、希望者全員でくじ引きをしたというケースがありましたけれど、今後同じようなケースが出てきた場合、今後どのように対応していこうとお考えでしょうか。

福村議長

希望者が多いことはいいことですが、だからといって43人全部やっていたらおさまりがつかないことですし、どこかで決めなければいけない。ということで人数割りの時間割を今はしているのだと思うのです。それから、今のままでも予算委員会を含めて24人はできるわけですよ。一般質問もやって予算委員会もそこまではなかなかね、人がいなければ別ですけど、予算委員会も含めると2回に1回は平均に回っていけばできるのでね。今ぐらいが、まあもう少し検討はしなければいけないけれど、今を大きく変える必要はないのではないかというふうに思います。そうしないと質問は、私は数さえすればいいというものではないと思うのです。やっぱりじっくり練って、そうしてある意味でどんといくのが質問なんですね、毎回、一般質問もする予算委員会もするなんてね。

またもう一つは、毎月常任委員会があり、そこで聞ける場所もまたあるので、そういう意味で私は、定数の半数以上はできるので基本的には大きく変えなくても今の状況でいいのではないかと思います。

記者

今年度中に勉強会か研修会をしたいというお話がありましたが、これはもちろん超党派でというか県議会としてやるものと考えているのでしょうか。

福村議長

それはそうです。

記者

どんなテーマとかどんな分野とかをお考えですか。

福村議長

まだこれから検討しなければいけません。私は釈迦に説法みたいな話でも基本的なことをお互いに一遍再確認したほうがいいと思う。例えば、地方自治の役割はなんなのかとか、あるいは議員に求められているもの、県会議員の体質というか必要な資質というか、県会議員に求められるものはどういうことが大事なのか。

もっとできれば、質問のあり方だとか。初歩的なことになるかもしれませんが、お互いにもう一回再確認した方がいろんな意味でいいのかなと。今、若い人もふえてきたということからもそういうふうに思っています。

記者

ねらいというのは、例えば、これまでそういったことが同じ会派の先輩から教えてもらってきたことで、それがそういった機能が少なくなってきたのか、もしくは効率的にそのようなことを皆で勉強した方がいいのではないかということなのか。若い人が多いということですが、議員としての経験値、能力というものが、少し今は落ちてきているということなのか。

福村議長

落ちてきているということではないのですけれど、私の就任の挨拶のときにも言わせてもらいましたけどね、私はそう思わないけど、今はよくちまたで知事一強だと言われる。

私は知事を弱くして、並行にというか、車の両輪にしても意味がないと、知事は強い方がいいのですよ。また知事もそんなこと言われるのは不本意だろうし、我々もそんなこと言われるのは屈辱なのですよ。やっぱりこれを本当の両輪にもっていくためには、議員お互いの質を上げて、対等以上の議論ができるように、それは質問というけれども、問うことも大事だけれども提案も含めてできるように、皆のレベルを上げていかないと実のあ

る議会というのは無理。

そういう意味で、まあ何となく過ごしてきている面もあるので、また時代も変わってきていますからね、地方政府のあり方、役割も時代とともに変わってきていると思うので、この令和の時代におけるこれからの地方政府のあり方、役割はというものはどうなのか、あるいは議員に求められることとは一体どういうものなのか、そういうことを基本に戻って全員がこれをやった方が、よくわかっている方がいらっしゃるかもしれないし、ほとんどわかっている方もいるかもしれないけれども、それは誰と誰ってわかりませんから、全員がレベルアップするためにもう一度、わかっている人は再認識すればいいし、気づいていない人には気づいてもらえればいいし、一遍、改めてやった方がいいと思っています。

記者

具体的に、議員にこういうふうになってほしいというイメージはありますか。

例えば、鋭い質問をする能力を上げるとか、議員提案の条例を出すとか、どのようなイメージをお持ちですか。

福村議長

そうですね。やっぱりなかなか議員というのは、国会議員も一緒だと思いますけど、初めから全部の分野で専門家というわけにはいきませんね。役人は毎日やっているのですからね。何十年もやっているのですから。自分の専門分野をまずは持つことだと私は思うのですね。そして徐々に幅を広げていく、そうしないとなかなか質問戦でも役人に対抗できない。そういう意味で、まず議員はどういうことを勉強すべきなのか、どうすべきなのかという初歩のところからもう一遍やった方がいいのかなあと、まあ皆優秀な人ですからちょっとすればいいだろうと。

記者

副議長に今議会を振り返っていただきたいのですが。

徳野副議長

定例会だけ。

記者

今定例会だけでなく議会の改革も含めていただいてもいいのですけれど。

徳野副議長

今、福村議長が言われたように僕も3期の中に入るということは、結局は社会での経験値が浅いか、それで僕は議会に来てもう8年という中において、野々市のことの予算の150億ぐらいは1年で見られますよ、それで今回、5,800億から若干減って、5,600億の予算となったときに教育費だけでも1,000億、じゃその1,000億のときに私学の団体に行ったときに、この人たちの退職金の部分が足りないのだなあと、また、昨日も目の不自由な方の協会の100周年の記念祝賀会に行ってきたのですが、その協会に毎年県の方から、盲導犬なりいろんな部分のサポート、プラス補助金が1億5千万円出ているとか、そういう細かいこと。また、僕ら能登のことはあんまりわからなくてね。山口議員とか友達がいるときは一緒にちょっと飲みに行こうか遊びに行こうかという部分ではわかるのですが、あそこら辺のやはり切実な道路の要望や、そして能登空港であれば全然小松空港の海外便よりも能登空港1年の乗りおりの人数が少ない、そしてその中の補助金は一体何になっているのかなあといったときには、これも皆さんの税金なんですけど、旅行者に少しずつお金を出して、でも62%を確保しなければいけないってというようなことを多分1期や2期の時にはなかなかわからなかったことがある中において、それでそういうもの全体の積み上げていうものを少しずつ福村議長が配慮していただいているんで、見せていただいているかと思っています。

先ほど、3期から下という部分において、議員の仕事っていうのはやはり、予算なり提案権は執行部ですが、議員にはきちんとした議決権があって、その議決したものを執行していただくということなんですけど、その議決の重要性と、またいろんな部分の質問をするにはいいのですが、その一番大事なのは、僕はやっぱりコミュニケーションがなかったらできなかつたと思うのです。本当にこの立場にさせていただいて、8年もさせていただいているので各部長とは本当に仲よくじゃないですけど、人的なコミュニケーションがないと。営業マンも一緒だと思うのですが、新人がぼつと行つたってその社長にも課長にもお会いできないし、こちらから与えるものがない中において、じゃ執行部と、気持ちは3期以下の方も執行部も同じなんですけど、どうして石川県を発展させることができるかなあという部分だと思います。

そういう部分で福村議長が、そういう機会を与えてくれたことには本当に感謝しています。

記者

議長の議会改革を支えていくということですか。

徳野副議長

結局は、いつまでも知事も福村議長に頼っているわけにいかないし、僕らも誰かを育てていかなければならないし、なんとか全体がわかる人、そういう人、僕なんかあそこは無理やからね。病院とか医療関係は全くわからないから、いろんな助成の質問をしているの

を聞くとすごいなあと思って。そうだけど本当に一人一人がエキスパートになってチームとして明確に石川県をどういうふうにしていきたいという認識を持ちながらやっていくていいのかなあと思っています。

多分、そういうことは福村議長から見れば歯がゆいとなると思うので、僕らも質問を聞いて、「何でこんな質問を」と思っはいけないんだろうけど、自分の子供とか社員と同じで「もう少し勉強してこいや」とか思うときもあるし、それで多分皆さん、初めてだから聞きたいのですが「ちょっと調べてこいや。それ前にもやっていたぞ」とか、執行部から言われるのも「この質問をしてもいい答弁は出せませんよ」、だから「やめた方がいいんじゃないですか」と。

議場である部分は主義主張も必要ですけど、積み上げていきたい部分なのでその場合は「ちょっと」と言われたこともあったので、それを「徳野さん、言っても明確に答えを出すこともできないし、国益の部分でもあるから」とかいろいろあるんでそういうこともありますが、でもそれはわかっているんですけども僕は「ここの部分は主義主張をさせてくれ」と通したこともありますが、でも相手も県議をつぶそうと思ってやっているわけではないんでね。

県庁の職員さんも立派な人がいっぱいいらっしゃいますので、その中で本当に県庁の中でもものすごく立派でも60歳で皆さんいなくなるんですよ。ほとんどの方が。そういう中において僕らは、一回一回選挙はありますけど、自分たちのレベルアップを図っていきたくて、図っていかねばいけないと思っていますし、その部分を福村議長がこうやって、やっていただけなのであれば、本当にうれしいと思っています。やっぱり、先ほども言われましたけど防波堤になって、僕らが言うと角が立つので、3期になったら言ってもいいかなと思ったんですが、言った瞬間に角が立ってしまいますんで、言えない部分なり、配慮しないと、先輩を立てないといけない部分なり、こういう言い方もあるんだなあ、日々しっかり学ばせてもらっています。